

デイリー・ジーザス・ニュース #219

イエスはラザロを死から蘇らせる

イエスはマリアを慰める

ヨハネ11.28-37

28 マルタは信仰を告白した後、戻って妹のマリアを呼び、「先生がここにいらっしゃって、あなたを呼んでおられます」と言いました。

29 マリアはこれを聞くと、すぐに立ち上がり、まっすぐイエスのもとへ行きました。30 イエスはまだ村に入らず、マルタが出迎えた場所で待っておられた。

31 家の中でマリアと一緒にいて彼女を慰めていたユダヤ人たちは、彼女が突然立ち上がって出て行くのを見て、彼女が墓に嘆きに行くのだろうと思い、後を追った。

32 マリアはイエスのいる場所に到着し、イエスを見ると、イエスの足元にひれ伏して言いました。「主よ、もしあなたがここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょう。しかし、あなたはここにはいなかったのです。」

33 イエスは、彼女が泣いているのと、彼女と一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのを見て、非常に心を痛め、動揺された。34 「**彼をどこに置いたのですか？**」彼は尋ねた。

彼らは答えた。「主よ、来てご覧下さい。」

35 イエスは泣いた。

36 するとユダヤ人たちは言った。「見よ！彼はなんと彼を愛していたことか！」

37 しかし、彼らのうちのある者は言った。「盲人の目をあけた方が、この人を死なせないようにすることはできなかったのか。」

=====

注: 私たちは「混合テキスト」の原典福音書を次のように上付き文字で識別します: マタイ = ^{MT}、マーク = ^M、ルカ = ^L、ヨハネ = ^J、使徒行伝 = ^A。この「上付きID」は引用文の冒頭に挿入され、別の上付き文字が現れるまでその聖書書を識別します。さらに、**赤いイタリック体はイエスの言葉を示します**。旧約聖書の引用は大文字で書かれています。

コンテキストダイジェスト	
位置	エルサレム近郊のベタニア
タイムライン	3月 (38月)
イエスの生涯の文脈	第7段階：ペレアにおけるイエスの宣教

デイリー・ジーザス・ニュース #219

	B. イエスはラザロを死から蘇らせる
タイトル	4. イエスはマリアを慰める

コメント：

今日の朗読は、イエスがラザロを死から蘇らせる直前、イエスとマリア、そしてラザロの死を悼んで集まっていた人々がどのように考え、感じていたかを示しています。ヨハネはこの場面で皮肉な表現を用いて、イエスの栄光を私たちに示しています。

前回の朗読では、マルタとマリアの二人が、兄弟の死についてイエスを丁寧に責めていたことに注目しました。

それでも彼らは、助けを求める嘆願にイエスが応えなかったことに失望しながらも、依然としてイエスを救い主、主として信じていました。嘆き悲しむ人々は、ラザロの死の責任をイエスに押し付けていたのです。

主は彼のこの姿に深く悲しみ、心を痛められました。彼の感情を表す言葉は、最も激しい感情を表す「激しい」でした。彼は激しく泣きました。

が姉妹たちとラザロに対してどれほど深い愛と気遣いを示していたかは、誰の目にも明らかでした。しかし、イエスの深い悲しみの本質を理解する者は誰もいませんでした。なぜイエスはこの状況に深く心を痛めたのでしょうか。

表面的には、ラザロの死の責任を負わされたことでイエスは傷ついたと想像できるかもしれませんが。イエスは過去39ヶ月間、助けを求めてイエスのもて来たる人々の期待と期待をはるかに超える働きをしてきました。実際、ラザロの死は、イエスの宣教活動において、助けを求めた人がイエスに助けを求められなかった唯一の出来事でした。

それは不公平でした。イエスは何千人もの人々を癒されました。もしラザロが例外だったとしても、責められるべきではありませんでした。しかし、イエスがそれほど悩まされたのは、そのことではありませんでした。

この箇所の意味するところは、イエスが人々が、自分が彼らのためにしようとしていることの素晴らしさを理解しなかったために、不必要に苦しんでいることにイエスが悲しんでいたということである。

主がマルタに「わたしは復活であり、命である」と言われた時、彼女はその言葉を死者の最終的な復活と解釈しました。それは間違いではありませんでした。イエスは将来、この世の終わりにすべての死者を必ず復活させるのです。しかし、イエスはラザロを数分のうちに死から蘇らせることも計画していました。マルタはそれを理解しておらず、イエスがこれから行うことを喜ぶどころか、むなしく悲しんでいました。

イエスは初めから「この病気は死に至るものではありません。神の栄光のためです...」(11.4)と語っておられました。ラザロの病気が死に至るものではないという約束は、使者によってマルタとマリアに伝えら

デイリー・ジーザス・ニュース #219

れていたに違いありません。イエスはすぐに「**信じるなら神の栄光を見るだろうと、言ったではないか**」とおっしゃるでしょう。マルタとマリアが、ご自身の約束を信じてくれることを期待しておられたのです。

イエスは、マルタやマリア、そして多くの人々が、イエスが本当にどのような方であるかを十分に理解していなかったために、不必要に悲しんでいるのを目にしました。そうです、マルタはイエスがメシア、つまり神の子であると告白したのです。

イエスは「我は在る」、すなわち人間の肉体を宿したヤハウェでもありました。イエスが語った言葉は、どれも彼にとって実現不可能なものではありませんでした。神は決して嘘をつかないので、守れない約束は決してなさらないのです。

イエスは、慈しみ深く、謙虚に、思いやり深く、そして愛をもって、他の人々が感じている苦しみを深く心に留められました。たとえ、ご自身がこれからなさろうとしていることを考えると、それが全く不必要であったとしてもです。イエスは、彼らの信仰と理解の欠如を責めることなく、彼らを抱きしめ、彼らの苦しみを自らのものとされました。これは、この状況においてイエスに示された三位一体の真の善良さです。

ここには二つの大きな皮肉があります。一つは、姉妹や友人たちがイエスがラザ口の病気を治さなかったために傷ついたことです。しかし実際には、イエスはラザ口を死から蘇らせようとしていたのです。

さらに、イエスは約束通り、間もなく死から蘇り、究極の癒し—永遠の復活の体—を人類にもたらすことになっていた。イエスがこれから行う二重の奇跡の規模は、人々の悲しみを無駄にするものであった。皮肉なことに、イエスはまさにその奇跡を成し遂げようとしていたのだ。

さらに、会葬者たちは、イエスがラザ口のために涙を流す様子から、ラザ口をどれほど愛していたかに気づきました。皮肉なことに、ラザ口、そして他のすべての人々に対するイエスの真の愛の証しは、ラザ口の死後に流された涙ではありませんでした。

イエスの愛の大きさを究極的に示していたのは、ゲッセマネで私たち一人一人のために流された涙、そして十字架上で私たちの身代わりとなって亡くなった時の涙でした。ヨハネはこの皮肉を用いて、ラザ口の一時的な死とは対照的に、イエスがご自身の死を通して私たち一人一人のために示された愛の栄光と大きさを、より深く理解できるように私たちを準備させようとしていたのです。

応用：

墮落した世界において、痛みは避けられないものです。しかし、痛みは神の計画において、重要な目的を持っています。

しかし、マルタとマリアのように、私たちは皆、多くの不必要な苦しみを経験します。もし彼女たちがイエスの御言葉を信じていたなら、ラザ口が亡くなった時、イエスが来られた時に彼らの上に大いなる栄光が降り注ぐことを知って、祝宴を開いていたでしょう。

デイリー・ジーザス・ニュース #219

私たちは、イエス様がすでに私たちのために語ってくださり、してくださったこと、そしてイエス様の霊によって私たちの中でなされたことという資源の中で生きることができていないために、必要以上に傷ついてしまうことがあります。

良い知らせは、イエスが、マルタとマリアがイエスが約束したことを理解できなかったときに、彼らに愛情深い同情をたっぷり示したのと同じように、私たちの弱さにも同情してくださるということです。

イエスは、あなたが完全に信じるならあなたの悲しみや痛みを和らげたり、あるいは取り除いたりするという約束を御言葉の中であなたに与えたことがありますか。

どのように祈って、これを神に委ねることができるでしょうか？